

定本
坂口安吾全集

第一卷

宮本武蔵全集

第一卷

冬樹社

定本 坂口安吾全集 第一卷

定価 一、〇〇〇

昭和四十三年一月十五月初版 第一次刷行

著者 坂 口 安 吾

発行者 滝 泰 三

印刷所 三容堂印刷株式会社

東京都千代田区神田錦町二ノ二

製本所 加藤三代治製本所

東京都新宿区早稲田鶴巻町二二番地

発行所 冬 樹 社

東京都千代田区九段南二の四の一四

電話東京(三三)三四二一(大代表)

振替東京七五七



定本 坂口安吾全集 第一卷

監修

石川 淳

河上徹太郎

小林 秀雄

獅子 文六

編纂

奥野 健男

檀 一雄

平野 謙

福田 恆存

題字

石川 淳

第一卷
目
次

木枯の酒倉から

ふるさとに寄する讃歌

風博士

黒谷村

海の霧

寛博士の廃顔

母

竹藪の家

蟬

群集の人

Pierre Philosophale

村のひと騒ぎ

小さな部屋

9

20

27

33

56

66

81

86

158

172

178

183

194

麓

208

姦淫に寄す

232

麓（戯曲）

242

淫者山に乗り込む

262

蒼茫夢

271

金談にからまる詩的要素の神秘性に就いて

291

逃げたい心

302

西東

320

おみな

323

狼園

329

禅僧

386

老嫗面

395

雨宮紅庵

413

母を殺した少年

429

女占師の前にて

434

閑山

448

紫大納言

456

木々の精、谷の精

469

勉強記

494

総理大臣が貰った手紙の話

511

盗まれた手紙の話

520

解説 奥野健男

551

作家論 磯田光一

573

解題 渡辺彰

585

肥田皓三

小

説

I

木枯の酒倉から

聖なる酔っ払いは神々の魔手に誘惑された話

発端

木枯の荒れ狂う一日、僕は今度武蔵野に居をトそうと、ただ一人、村から村を歩いていたので。物覚えの悪い僕は、物の二時間とたたぬうちにその朝発足した、とある停車場への戻り道を混がらがせてしまったのですが、根が無神経な男ですから、ままよいい処が見つかったらその瞬間から其処へ住んじまえばいいんだ、住むのは身体だけで事足りる筈なんだからとそう決心をつけて、それからもう滅茶苦茶に歩き出したんです。ところが案外なもので（えてして僕のやることは失敗に畢るものですから）見はるかす武蔵野が真紅に焼ける夕暮れという時分に途方もなく気に入った一つの村落を

見つけ出したのです。夢ではないかと悦んで思わず快心の笑みを洩しておりますと、村端れの一軒に突然物の破ける音がして、やがて荒れ狂う木枯にふうわりと雨戸が一枚倒れるのを見ましたが、次の瞬間には真黒な塊が弾丸のように駆け出て、僕の方へまっしぐらに駆け寄ってくるのです。近づくとよくよく見ますと、いやに僕によく似た——背が高く毛髪は茫々とし、顔色は蒼白で、駆けてきた所為でもありませんが、何となく疲労の色が顔に漂っていて、妙チキンなビジャマを着ているんです。一体こいつほんとに気狂いかしら、と無論僕はそう思いついたのですが、広い武蔵野の真ん中で紅々とただ二人照し出されてみますと、この怪物がばかに親密に見えるものですから、君、君、と僕は通りすぎるこの怪物を呼びとめました。ところがこの周章て者は僕の声などてんで耳に這入らないらしく尚も一散に弾となり、水平線

の向う側へ飛び去りそうに見えたものですから、僕も亦とっさにわあっといって一本の線になってこの男の跡を追いかけるような次第になったのですが——大根の四五本ぬき棄てられてある横つちのあたりでやっとこの周章て者の腰のところにへ武者振りつくと勢あまって二人諸共深々と黒い土肌へめり込んでしまったのです。顔の半べたを土にしてフウフウと息をつきながら、夢からさめたもののようにボカンとしているこの周章て者に僕は亦とぎれとぎれに詫を述べ、如何なる必然と偶然の力がかかる結果を招致するに至ったものであるかということを追うて説明いたしました。

——結局君はこの村に貸間亦是貸家が存在するであろうかということを僕にききたかったんだね。

と、話してみれば物分りのいい男で、心臓の動悸がようやくに止ったらしく、こう（顔の半べたを土にして）反問するのです。

——そうです、何か御心当りがありますかしら。

と、僕はもうひどくこの周章て者に好意を感じ出していたのですが、物のはずみで拾いあげた大根をなで廻しながらこんな風にきいたのです。するとこの男は、僕の言うことが呑み込めないのでしょうか（えて哲人は食べるその理窟さえ分らないものだと思いますから）怪訝な顔をして、

——無いこともないが、かりにあったとして、君はそれを

どうする心算なんだ

というのです。

——無論僕が住むんですがね。

——う、ぶるぶる、止した方がよろしいよ。

——何故ですか？

——う、ぶるぶるじゃよ。

と彼は一きわ顔色を蒼く鋭くするのです。しかし彼は見かけによらぬ親切な男で、改めて僕を自分の宿（さっき雨戸を蹴倒して出てきたところだ）へ案内すると、どうしても君はこの寒い村に居を構えるつもりであるかと尋ね、頑としてそうであると答えると、「尊公も亦呪われたる灰色じや」と目を伏せながら、次のような笑うべき物語を語ってきかせたのです。木枯が窓を叩くたびに、う、ぶるぶると震えながら——

蒼白なる狂人の独白

俺の行く道はいつも茨だ。茨だけれど愉快なんだ。茨よりほかの物を、俺には想像ができなかったから。

俺は禁酒を声明した。肉体的、経済的、ならびに味覚的に於てすら、酒そのものが俺にはけつして愉快なる存在ではなかったからだ。無論禁酒を声明した程だから、昔は酒を呑んだんだ。あべべい、酒は茨だねえ、不快極まる存在じゃよ、と言いながら。

酒は君、偉大なる人間の理性を痺らせるものじゃよ。酒はあばばいじゃ。汝の明朗なる人間の活動は忽ちにして神の如く曇るぞよ。おそれよ、おそれよ、という注告は遺憾ながら俺の為にはベチシオ・プリンシピイの誤謬を犯している。

俺の理性が痺れうるものならば——余は酒樽の冠を被り、輕の大きいなる觴を捧げ奉って、ロンサルロンサルの如くたちどころに下落するぞよ。

——愛する友よ。君は人間として甚だいたらん男じゃ。酒呑めば酒と化すことを、人間はその誇りとするものじゃよ。まま、ええさ。唄いかつ踊り、寂しげなる村々を巡礼して悩みを悦びの如く詩にあらわし、一文の喜捨にも往昔の騎士に似て丁重なる礼を返し、落日と共に峠を求めて山毛櫨の杜へ消え去るのも一つの修業方法であるな。旅は人の心を空っぽにするものじゃよ。そのくせひどく感動しやすくなるもんだから、貴公のような鈍愚利でも時あれば沁むように酒が恋しくなるかも知れん。ああ！酒呑まぬ男は猿にかも似ていると、うまいことを言うもんだねえ。賢ら人は、いやだねえ。

ゲジゲジを思わせるよ、君。

とわが友は暗澹たる顔をさらに深く曇らせて、ゲジゲジを払うもののように觴を振り廻すのだ。わが友は日本にたった一人の瑜伽行者だ。瘦せさらばうて樹下岩窟に苦行し百日千日の断食を常とするかの輩です。業成れば幻術の妙を極めて自在を得るところの、あれだ——が、俺の友達は酒樽の如く脂肪肥りの酔っ払いだ。呑んだくれの瑜伽行者もないもんじゃよ、君。

——余は断じて酒をやめるぞよ。と俺はその場で声明した。ひたすらに理性をみがき、常に煩悶を反芻して、見よ煩悶の塊と化するぞよ。右も煩悶左も煩悶、前も後も煩悶じゃよ。目を開けば煩悶を見、物を思えば煩悶を思い、煩悶を忘れんとして煩悶に助けをかり、せつばつまれば常に英雄の如くニタニタと笑いつつ、余は理性を銚とし城として奮然死守攻撃し、やがて冷然として余の頸をも理性もてくびくくるであらう。見よ、

——余は断じて酒を止めるぞよ。

と俺は断乎として声明したのだが——まあ待ち給え。聖なる俺の決心を永遠ならしむるために、も一度立ち戻って事のいきさつに詩的情緒の環をかけさせてくれ給え。

毎年のことだが、夏近くなると俺は酒倉へサヨナラをする。それというのが、君、ペンペン草を我無者羅に俺達の酒倉へはやすからなんじゃよ。見給え。夏が来ると俺達の酒倉はペンペン草で背の半分を埋めてしまうのだ。酒倉の壁のひびからもペンペン草が頸を出す。同じ草が傾いた屋根の上では頭をふり、庭も亦一面にペンペン草の波なんだ。

一体俺達の酒倉はこれでもれっきとした造り酒屋なんだけど、何分この亭主は自分の酒を自分一人であらかた呑みほしてしまふものだから、長い年月に母屋を呑み、庭の立木を呑み（客ではない、無論亭主自身が呑んだんだ）、今では彼の寝室であり、やがては棺桶であるところの、破れはおけた酒倉がただ一つ残っているばかりだ。だから君、夏がきてペンペン草が酒倉の白壁の半分を包み隠してしまうとき、俺は呆然として無から有の出た奇蹟をば信ずるに至るのだけれど——君が見かけ程詩人なら、疑うべき筋合ではないのじゃよ。といったわけで、ペンペン草は生え放題に庭も道も一樣に塗りつぶすものだから、俺は酒倉への出入にペンペン草に捲き込まれてとんだ苦勞をしてしまうのだ。足をからむとか蛇をふみつけるとかして、わあっ！と及腰になりかかると、鼻孔にまぎれ込む奴もペンペン草であるし懷にガサガサとなる奴も——ああ何処をどうして潜り込んだのか背中、何か騒ぐ物があるのもみんなこのペンペン草なんだ。俺はうう

んと呻ったまま天高く両腕をつきあげて進退ここに谷まったという印をしてしまうのだ。すると真夏の太陽がカアンというあの変テコな沈黙でいやというほど俺の頭を叩きのめすものだから、俺は危く目をまわそうとするのじゃよ。おお光よ、おおペンペン草よ、怖るべき力よ、俺の若き生命よ。余は緑なすペンペン草の如く太陽のあるところへ一目散に駆けてゆかねばならぬ。ああ酒は憎むべき灰色じゃよ、と俺は思うのだ。

——酒は頑としてサヨナラじゃよ。

と、そこで俺は憤然として酒倉を脱走するのだ。「ああ太陽よ」とか「おお生命よ」とか、まあそういったことを喚きながら、俺は何分あまりにも興奮して酒倉を走り出るものだから、つい、亦ペンペン草に足をとられて大概は四ん這いになり畢り、酒は実に灰色じゃよ、俺は頑としてそれを好まんよなどと叫びながら這い出してゆくのだった。

すると酒倉の亭主は——先刻御承知の瑜伽行者だが——ペンペン草の間から垣間見える俺の尻を見送りながら、「木枯が吹いたら又おいでよ」と、ニタニタ笑うのだ、「木枯が吹いたら又おいでよ」と、ね。

まことに木枯と酒と俺は因果な三角關係を持つものである——木枯は、恰も俺の活力を刺し殺すように酒倉のペンペン草を枯してしまうのだ。すると俺は——

ああ！ 俺は冬が大嫌いだあ！

冬は——俺の心をさむざむと白く冷くするのじゃよ。寒気は俺の脳味噌をも氷らせるのだ。俺の一切の運転はハタと休止して——俺はペンペン草と一緒に、ここに果敢なく枯れ果ててしまうのだ。顔色はいうまでもなく蒼白となり、目は鈍くかがやき、脳味噌は——脳味噌という代物を余はひどく怖れるよ——脳味噌は、氷りついて動かないのだ。そこで俺は様々な手段を講じてぜひとも脳味噌を動かそうと勉めるのだ。俺の目はいみじくも光り輝き、額は瘦せくたびれて、頭は唸りを生じ、俺は——ほがらかに気狂いになりそうな気がするのだ。俺の唇は酒を一滴も呑まぬのに呂律も廻らなくなつて、ワハ、オモチ、ロイヨ、などと言うのだ。こんな風にして、俺の身体は何かガラスのような脆い物質から出来ていて、どこかしらん一寸でも動かしただが最後、ピチピチと音がしてこわれちまうような気になる。舌を出してさえセンマイがくずれそな気がするから（ああ、舌が出てみたいねえ）笑いたくてたまらないのだが——俺は断じて笑わんよ。武蔵野に展かれた宿の窓から、俺は時々頸をつき延して、怖るべき冬の情勢を探るのだ。すると見渡す視野がばかに広茫と果もなくひろがつてゆくのに、その都度瞠若として度胆を失つてしまうのだ。冬の広さを見ると、俺は俺の存在が消えてなくなるように感じるものだから……

……こうして、木枯のうねり、が亦一とうねり強くなると、俺はつい堪りかねて、ふっとあの酒倉を、思い出してしまふのだ。憎むべき酒よ、呪うべき酒樽よ、怖るべき冬よ、うぶるぶるよ。俺の恋心は果もなくつのつて、俺の魂はいつの間にかやら木枯の武蔵野を——とびに、酒倉の戸の隙間から悪魔風な法式で、ふいとあの酒倉へもぐり込んでしまふのだ。すると、酒倉の亭主は——

（ああ、彼の不愉快な幻術は、如何に俺を悩ますことか！）

——おもむろに觴をひねくりながら、まぎれ込んだ俺の魂をともなく見破ってしまうのだ。彼は脂ぎった太くまん丸い顔をニタニタと笑わせる、そしてグイと一杯呑みはすといやに取り澄まして、やおら得意なる背^{ウツクタイサヤ}亀坐を組み、おもむろに調息するのだ。見給え——彼は分身術を用いて、さむざむと武蔵野に展かれた俺の窓から、脂ぎった顔のニタニタをぬつと現す。

——愛する友よ、寒さは人間の敵だねえ。彼等がかつてナポレオンをオロシヤに破り、転じては若きエルテルの詩人を伊太利に送り、澆季の今日に於ては鈍愚利の尊公をも酒倉へ送ろうとする。人間はかくの如く常に温かくあるべきじゃよ。その意味に於て尊公の心に萌し出でた本能の芽は、聖なる鉢^{ハチ}蘭^{ラン}梨^リの三昧に比していささかも遜るところを見出しがたいのじゃよ。俺^{オナ}俺^{オナ}（麗棒め）といったものじゃよ。

と言うのだ。

俺は憤然として何事かを絶叫しようと思うのだが、うかつに絶叫しては願のゼンマイから必然的に頭のゼンマイへかけて狂い出す怖れを感じるものだから、絶望的なニヤニヤを笑って行者のニタニタを眺めているのだ。すると俺の心臓はひどく臆病になって次の一秒がばかに恐ろしく不気味に思われ、沈黙に居堪らなくなり出すから、もうおさえ切れずにわあ——と叫ぶと——

一っぺんに階段を跳び降りて雨戸を蹴破ると、もう武蔵野の木枯は弾になって一条にころがっているのだ。

わあ！

助けてくれえ、冬籠りだあ！

と、かように声高く武蔵野を喚きながら、俺は酒倉の戸を踏み破って——

（俺達の酒倉では二十石の酒樽から酒をのむのじゃよ）

——二十石の酒樽を抱きかかえるようにしてグイグイ、ぐいぐいと酒の灰色を一息に（茨じゃよ）あおるのだ。木枯がペンペン草を吹き倒すとき、俺は毎年もとの酔っ払いに還元してしまうのだった。

こうして俺、聖なる呑んだくれは、武蔵野の木枯が真紅に焼ける夕まぐれ足を速めて酒倉へ急ぐのだが——すると酒倉の横っちょには素っ裸の柿の木が一本だけ立っているのだ

（君は勿論知るまいが——）。この柿は葉が落ちてても柿の実を三つ四つブラ下げて、泌むような影を酒倉の白壁へ落しているのだが——俺は毎日このまっかな柿の実へ俺の魂を忘れて、ふいと酒倉へもぐるのだ——と、こう思うのがせめても俺の口実なんだ。だから俺は安心して、あれとこれとは別物だけれど、まるで魂を注ぐように、酒樽にとびかかると、ぐいぐいぐいぐいと酒を魂を呑んじまうんだあ！ 概して俺はこの酒倉で最もへべれけに酔っ払う男の唯一人で、酒倉の階段を踏みはずすと響へ宙づるしにブラ下ったまま寝ちまうこともままあるのだ。そんな朝、目が覚めると、頭の下から足の方へ登ってゆく太陽を天獄羅だろうかと眺めるんだが……

酒は憎むべき茨じゃよ、全く俺は毎夜ダブダブ酔っ払って呪いをあげるのだけれど——冒頭にお話した聖なる禁酒の物語はペンペン草の夏ではない。頑として木枯の真った中に（うう、ふるふる）行われたのじゃよ。それぞれは悲痛なものであったのだが、まあきき給え。

——愛する行者よ。と、俺は一夜鬱積した酒の呪いにたまりかねて、幾杯目かの觴を呑みほしたとたんに、憎むべき楽天主義を打破しようと論戦の火蓋を切ったのだ。

——愛する行者よ、鉢頭關梨の学説は不幸にしてイマヌエル・カント氏に先立って生れたるが故にここにたまたま不運